現代ビルマ語における動詞配列の類型について

澤田　英夫

はじめに

ビルマ語では、動詞が文末以外の位置に現れる際には、文末に位置する主文の動詞に対してどのような関係をとるかを表す何らかの標識を伴うのが普通である。

(1) aye'　txau'-pi:　zaga:　pyo:^te_‖　酒を飲んで話をした。
　酒　飲む SCM　言葉　話す VSM

(2) kan_　kaun:-lou.　ma- mei. ^phu:‖　運良く忘れなかった。
　運　良い　SCM　NEG 忘れる VSM

(3) yei_　chou:-lou.　wa.　^ pi_ -la:‖　充分水浴びしたか。
　水　浴びる SCM　満足する VSM〈疑問〉

(4) si'　pi: -hma.　txwa:-ya.^te_‖　戦争が終わってようやく行くことが
　戦争 終わる SCM　行く　VMD VSM　できた。

(5) bama_txamain:　txin_ ^ phou.　la_^te_‖　ビルマ史を学びに来た。
　ビルマ史　学ぶ …するため　来る VSM

しかし、ある場合には、２つあるいはそれ以上の動詞が、その間の関係を示す標識を介することなく配列される。

(6) ma.ngwei_ma.　thamin:　che'- sa: ^te_‖　マ・ングウェマが御飯を作って
　(人名)　御飯　炊く 食べる VSM　食べた。

(7) apo_da'-ka.　shin:-la_^te_‖　上の階から降りてきた。
　上の階　SRC 降りる 来る VSM

(8) thamin:　sa: - pi: ^ pi_‖　御飯を食べ終わった。
　御飯　食べる 終わる VSM

(9) khana.　pha' -ci. ^te_‖　ちょっと読んでみた。
　ちょっと 読む〈試行〉VSM

(10) bama_zaga:^kou_　she'-txin_^te_‖　ビルマ語を引続き勉強した。
　ビルマ語　OBJ 続けて 学ぶ VSM

(11) txu_　se'bein:　si: ^ta' -te_‖　彼は自転車に乗ることができる。
　彼　自転車　乗る〈能力〉VSM

(12) nyi_^kou_　alou' lou'-khain:^te_‖　弟に仕事をさせた。
　弟　OBJ　仕事　する〈使役〉VSM

(6)-(12)に挙げたような動詞配列は、次の２つの点から見て興味深い。第１に、

このような形式は動詞間の関係を明示しないために様々な意味のバラエティーを示すということ。第２に、これらの形式では１動詞句中に２つの動詞があるわけだが、その場合、個々の動詞の持つ語彙的要求、とりわけ項支配の要求が、動詞句全般が満たすべき要求と両立しなければならないということである。

動詞配列の中には、そのうち一方の要素が単独の用法とは異なった意味や機能を示す場合があるが、そのような場合にも動詞句全般に対する要求は満たされているのであり、また逆に、動詞句に対する要求を満たすような形でしか意味の変化は起こらない。それゆえ、上の２つの点は互いに関連しあっていると言えよう。

本稿では、この２つの点のうち特に後者に着目しつつ、ビルマ語の動詞配列全般の記述を試みる。

１．ビルマ語の動詞文の構造

まず最初に、ビルマ語の動詞文の構造について概観しておく。[1)]

ビルマ語の動詞文の構造の基本形式は、動詞に１つないしは複数の名詞句が先行し、動詞の後に文全体の法を担う助辞（法標識）[2)]の付加されたものである。しばしば主動詞に後続しこれを修飾する助辞（動詞修飾素）を伴う。否定の形式においては前接辞ma- が用いられる。また、法標識の前後には、丁寧・疑問・確信・念押しなどの語調を表したり、法標識の表す法の意味に修飾を加える助辞（文修飾素）が置かれることもある。動詞に先行する名詞句の後には、動詞との関係を示すための助辞（格標識）か特殊な意味役割を表示する名詞的表現（特殊補語名詞）が付加され、さらにその後に、主として談話的な情報を担うと考えられる助辞（補語修飾素）が付加されることもある。以上をまとめると(13)のようになる。

(13)

$$\mathrm{NP1}\left\{\begin{matrix}\mathrm{CM}\\ \mathrm{SCN}\end{matrix}\right\}(\text{-CMD})\quad \mathrm{NP2}\left\{\begin{matrix}\mathrm{CM}\\ \mathrm{SCN}\end{matrix}\right\}(\text{-CMD})\ \cdots\ (\mathrm{NEG}\text{-})\mathrm{V}(\text{-VMD})(\text{-SMDp})\text{-}\mathrm{MM}(\text{-SMDf})$$

NP：名詞句	V：動詞
CM：格標識	VMD:動詞修飾素
SCN:特殊補語名詞	MM：法標識
CMD:補語修飾素	SMDp：文修飾素（MMに先行）
NEG:否定前接辞(ma-)	SMDf：文修飾素（MMに後続）

関係表示付きの名詞句を総称して名詞句補語(Noun Phrase CoMPLement)と呼ぶ。名詞的補語のうちで動詞の表す事象の解釈のために不可欠な意味役割を持つものを特に項(ARGument)と呼び、そうでない付加的補語と区別する。格標識を伴う名詞的

補語が常に項であるとは限らず、特殊補語名詞を伴う名詞的補語が常に付加的であるとも言えない。項のうちで、格標識-0を取るものだけはその意味役割が一定でない。-0を持つこのような項のうち、格標識-0が-ka./-ha_ と交替し得るものを、特に主語項と呼ぶ。[3] 主語項以外の項を総称して非主語項と呼ぶ。

(14) NPCMPL = NP-CM(-CMD)
　　NP-SCN(-CMD)

NPCMPL┬ ARG ┬ SUBJ
　　│　　└ non-subject ARG
　　└ optional NPCMPL

動詞修飾素を伴った動詞を動詞述部(Verb PREDicate)と、項を伴った動詞述部を動詞句(Verb Phrase) と、そして法標識（および文修飾素）を伴った動詞句を動詞文(Verb Sentence) と、それぞれ呼ぶことにする。[4]

(15)　NPCMPL1　(NPCMPL2･･･)　(NEG-)V(-VMD)(-SMDp)-MM(-SMDf)

└ VPRED ┘

└ VP ┘

└ VS ┘

動詞述部が常に１つの動詞しか含まないかというとそうではない。動詞述部が連続する複数の動詞を含む場合、この複数の動詞の列を動詞配列と名付ける。これに対し、動詞述部が１つの動詞しか含まない場合、この動詞を単純動詞と呼ぶことにする。

なお、以下の部分では、動詞配列として、動詞２つからなるもののみを考える。２つ以上の動詞からなる配列に見られる現象は、すべて２つの動詞の配列の場合に還元して考えることができるからである。

２．動詞配列の分類

2.1.　形式的分類の基準

まずはじめに、動詞配列を形式的基準によって分類することを考えよう。２つの動詞形態素からなる配列において、その２つの要素の結合の強さ、言い替えれば２つの要素の独立性は一定ではなく、いくつかの段階があると考えられる。結合の強さの原因となっているのはおそらく、意味的分節のしかた、つまり、世界の諸現象の中のどの部分を独立の意味的実質として取り出すかや、２つの要素の表す意味内容の間の相互依存関係などに起因するものと考えられる。そして、結合の強さの差は、何らかの形式的特徴に反映される。その主なものは、２つの動詞要素の間に別の要素が介入し得るかどうかということである。ここでは、動詞配列を分類する形式的な基準として、以下のものを考える。

2.1.1. 否定辞の位置

ビルマ語の否定辞ma- は、動詞につく一種の前接辞と考えることができる。単一の形態素からなる動詞を否定する場合には、その動詞に前接される。このことは、動詞が名詞句を項として取るか取らないかにかかわらない。

(16)a. txu_ khoun_^te_‖ 彼は跳んだ。
　　彼 跳ぶ VSM
　b. txu_ ma-khoun_^phu:‖ 彼は跳ばなかった。
　　NEG VSM

動詞と、それに先行する名詞句とが一体となってできた熟語動詞の場合にも、ma-は動詞要素に前接される。

(17)a. txu.-zaga:^kou_ na: thaun_^te_‖ 彼の言葉を聴いた。
　　彼の 言葉 OBJ 耳 立てる VSM
　b. txu.-zaga:^kou_ na: ma-thaun_^phu:‖ 彼の言葉を聴かなかった。
　　NEG VSM

この点から、ma- の前接される要素は、形式的にみて一つの独立した動詞であると考えることができる。

２つの動詞形態素からなる動詞配列V1-V2-は、否定辞のふるまいによって、次の２つのタイプに大別することができる。

ａ．否定辞ma- がV1に先行するもの。すなわち、否定において ma-V1-V2-の形式を取るもの。

ｂ．否定辞ma- がV2に先行するもの。すなわち、否定において V1-ma-V2-の形式を取るもの。[5),6)]

上での観察に基づいて、ma- の前接される要素が形式的に独立した一つの動詞であるという仮定に立つならば、その帰結として、ｂ．においてはV2が独立した動詞であるのに対し、ａ．においてはそうではないということになる。これを、動詞配列の形式的分類の第１の、そして最も強力な基準とする。

2.1.2. 補語修飾素の介入の可能性

さきにも述べたように、ビルマ語には、名詞句補語などに後続して、補語の担う談話的な役割などを表示する一連の助辞がある。このような助辞を補語修飾素(Complement MoDifier) と名付ける。[7)]例を挙げる。

-le: 「…もまた」
-to. 「…については」（対比）
-ko: 「…については？」（対比疑問）
-taun_「…でさえ」

(18) u:sein_lwin_-le:　di_-acaun:^kou_　txi.-me_‖
　　（人名）　　CMD この　事柄　OBJ　知る VSM
　ウ・セインルインもそのことを知っているだろう。
(19) u:maun_maun_^ko:　txi.-ye.-la:‖
　　（人名）　　CMD　　VSM〈疑問〉
　ウ・マウンマウンは知っているかしら？
(20) txu_^to.　ma-txi.^phu:　thin_^te_‖
　　彼　CMD　NEG　　VSM　思う　VSM
　彼は知らないと思う。

補語修飾素は、動詞述部の談話的役割を表示することもできる。述部が単純動詞である場合には、もともとの述部の前に、補語修飾素を伴った主動詞が重複して現れる。

(21) sa: ^to.　sa:^te_‖　食べたことは食べた。；食べはした。
　食べる CMD　　VSM

また、述部が動詞修飾素を含む場合、その動詞修飾素は通常は重複して現れない。

(22) sa:^to.　sa:^chin_^te_‖　食べはしたい。；食べたいことは食べたい。
　　〈願望〉

動詞配列の場合には、可能な形式は２つある。a)V1のみが補語修飾素を伴って動詞配列を含む述部に先行する形式、すなわち V1-CMD V1-V2-の形式。b)V1とV2の間に補語修飾素が割って入る形式、つまり、V1-CMD V2-の形式。

(23)a. kai'-to.　kai'-txa'-te_‖　噛み殺しはした。(V1-CMD V1-V2-)
　　噛む CMD　　殺す VSM
　b. kai'-to.　　txa'-te_‖　同上　　(V1-CMD V2-)

このうちa)の形式は、(22)にも見られるように、複数の形態素を含む動詞句ほとんどすべてにおいて可能な形式である。それに対してb)の形式は、２つの要素が形式的に互いに独立した動詞である場合にのみ可能である。b)が可能であるか否かを、形式的分類の第２の基準とする。

2.1.3.　２つの基準による形式的分類

上に掲げた２つの基準は、おおむね次のような相関を持つ。

	基準１	基準２
Ⅰ.	否定辞がV2に前接する	V1-CMD V2-が可能
Ⅱ.	否定辞がV1に前接する	V1-CMD V2-が不可能

２つの基準から判断して、２つの動詞要素の形式的な結び付きはⅠ．の方がⅡ．よりも弱い。

この一般的傾向に反する例としては次のようなものがある。

否定辞がV2に前接する／V1-CMD V2-が不可能

…V2がkaun:-, ya.-の場合

これらの場合には、補語修飾素の介在の可能性に関して、V1-CMD V1-V2- の形さえも不可能である。[8)]

否定辞がV1に前接する／V1-CMD V2-が可能

…V2がa:-, wun.-, ye:-, lwe_- の場合

以上のような例外はあるものの、大まかに言って、動詞要素の結び付きの強さに２段階があるということは確かである。例外の場合には基準１を優先させる。（後に意味的性質を見ていく過程において、このような処理が妥当であることが明らかになることと思う。）以下では、Ⅰ．のような性質を示す動詞配列を動詞連続(verb concatenation)と、Ⅱ．のようなものを複合動詞(compound verb) と、それぞれ名付ける。前者は形式的に独立した２つの動詞の連続であり、後者は２形態素の複合によってできた１つの動詞である。

2.1.4. V2の初頭音の有声化 ── 補助的な基準として

現代ビルマ語では、以下のような環境において音節初頭音の有声化が起こり得る。

初頭音が音素目録中に対応する有声の音素を持つ無声の閉鎖・破裂・破擦音音素であり（つまり、/k-,kh-,c-,ch-,s-,sh-,t-,th-,p-,ph-,tx-/のどれかであり）

先行する音節の末尾が声門閉鎖音/-'/以外の音素である（つまり、口母音ないしは鼻母音で終わっている）[9)]

このような有声化が最も典型的に起こるのは、動詞・名詞に後続する助辞の初頭音においてである。また、何段階もの複合によって複合名詞が形成されるとき、その一番最初の段階で複合される２つの要素のうち後者の初頭音は有声化を起こすことが多い。（^ は後続する音節初頭音の有声化を表す。）

(24) txu_^to.　yan_goun_-myou.^kou_　txwa:^chin_^pa_^te_‖

　　彼　CMD　ラングーン 町　GOAL　行く<願望><丁寧>VSM

　彼はというと、ラングーンへ行きたがっています。

(25) nain_gan_^cha: - caun:^txa:｜　外国人学生

　　((国家　　外)　(学校　男子))

一方、補語や動詞述部、および、名詞句の主要部の初頭音は決して有声化を起こさない。以上の点から、音節初頭音の有声化の有無は、先行する要素との結び付きの強さを示していると考えられる。ただ、先にも示したように、有声化を起こし得るような環境は、V1の末尾が声門閉鎖音以外の音素であり、かつV2の初頭音が対応する有声音素を持つ無声の音素である場合に限られており、すべての場合にこの性

質を基準として用いるわけにはいかない。それゆえ、これはあくまでも補助的基準としての価値しか持たない。

２つの形式的基準によって分類された２つの類について、有声化の環境にある場合に有声化を起こすかどうかについて見てみると、まず動詞連続においてはほとんどすべてV2の初頭音は有声化しない。唯一の例外はV2がtxwa:-の場合である。ただしこの場合にも、有声化するかどうかは、話者によって、また同一話者でも発話の速度によって異なるようである。一般に、発話速度が早くなるほど有声化しやすくなる傾向にある。

次に複合動詞であるが、この場合にはV2の初頭音が有声化を起こす場合と、そうでない場合とがある。前者の方が後者よりも、２つの動詞の結び付きは強いと考えられるが、この２つの違いが何を意味するのかについては、はっきりしたことはわからない。

2.2. 関係明示形式へのパラフレーズの可能性

2.1.で動詞配列を動詞連続と複合動詞の２つに分類したが、それぞれをさらに細かく分類するための基準として、動詞要素間の関係を明示するような形式へのパラフレーズが可能であるかどうかに着目する。パラフレーズの可能性は、本来意味の等価性に基づく意味的な特徴と考えるべきであるが、ここではそれぞれの意味的性質の検討を後に回し、単に形式的な特徴としてこれを用いる。

ビルマ語において、文の末尾に位置する主文の動詞には文標識が後接され、それ以外の動詞には主文の動詞との関係を示す何らかの表示が後接されるのが普通である。関係表示の種類として、次のようなものがある。

A. 文標識(Verb Sentence Marker)[10]

(26) txu_ bama_pyi_^kou_ txwa:^te_ thin_^pa_^te_ ||
　　彼　ビルマ　GOAL　行く　VSM　思う<丁寧>VSM

彼はビルマへ行ったと思います。

B. 文標識＋引用標識(Quotation Marker)

(27) txu_ bama_pyi_^kou_ txwa:^te_-lou. pyo:^te_ ||
　　VSM　QM　話す　VSM

彼はビルマへ行ったと言った。

C. 名詞節標識(Nominal Clause Marker)（＋格標識）[10]

(28) txu_ bama_pyi_^kou_ txwa:^ta_^kou_ txi.^txa-la: ||
　　NCM OBJ　知る　VSM <疑問>

彼がビルマへ行ったのを知っていますか。

D. 従属節標識(Subordinate Clause Marker)

(29) txu_ bama_pyi_^kou_ txwa:-yin_ hou_-lu_-ne. twei.-ya.-me_‖
行く SCM その 人 COM 会う VMD VSM

彼がビルマへ行ったらその人に会えるだろう。

E. 特殊補語名詞(Special Complement Noun)

この場合には、動詞と特殊補語名詞が一種の複合名詞を形成している。

(30) txu_ bama_pyi_^kou_ txwa:^phou. ngwei_ hya_-ya.-me_‖
…ため 金 探す VMD VSM

彼はビルマへ行くためにお金を稼がなければならない。

ビルマ語の動詞配列のうちあるものは、これらの形態素によって２つの動詞の関係を明示する形式へのパラフレーズが可能である。以下、動詞連続と複合動詞のそれぞれについて、関係明示形式へのパラフレーズの可能性を観察する。

2.2.1. 動詞連続におけるパラフレーズ

動詞連続の場合には、複数の動詞が連続をなしているわけであるから、２動詞間の関係を明示するような形式へのパラフレーズができることが期待される。しかしながら、実際には、すべての動詞連続がこのようなパラフレーズを可能とするわけではない。可能なパラフレーズとしては、次のようなものがある。

従属節標識-pi: によるパラフレーズ V1-V2- ＝ V1-pi: V2-

従属節標識-lou. によるパラフレーズ V1-V2- ＝ V1-lou. V2-

従属節標識-pi:は動詞「終わる」から派生したものであり、動詞によって表される事象の生起（あるいは話者による判断・認識）の継起を表す。２つの動詞の表す事象間の論理的なつながりは必ずしも含意しない。

(31) thamin: che'-pi: sa: ^ te_‖ 御飯を作って食べた。
御飯 炊く SCM 食べる VSM

(32) ko_phi_ txau'-pi: zaga: pyo:^te_‖ コーヒーを飲んで話をした。
コーヒー 飲む SCM 言葉 話す VSM

(33) ya_dxi_u.du.^ka. sou_^pi: ei:^te_‖ 気候は湿潤で寒冷だ。
気候 SUBJ 湿る SCM 寒い VSM (Okell:389)

一方、従属節標識-lou.は２つの動詞の表す事象間に何らかの論理的なつながりがあることを表す。

(34) du:yin:dxi: gaun:^po_ ca.-lou. txei_^te_‖
ドリアンの実 頭 上 落ちる SCM 死ぬ VSM

ドリアンの実が頭上に落ちて死んだ。(Okell:345)

(35) khin_bya.-ne. zaga: pyo:^chin_-lou. la_^te_‖
あなた INST 言葉 話す〈願望〉SCM 来る VSM

あなたと話がしたくて来た。

(36) thamin: che'-lou. sa:^te_‖ 御飯を作って食べた。

SCM

2つの動詞からなる動詞連続を、上に掲げた関係明示形式へのパラフレーズの可能性の点から分類すると、次のようになる。

タイプａ：従属節標識-pi:/-lou.どちらによるパラフレーズも可能なもの

タイプｂ：-pi:によるパラフレーズのみが可能なもの

これらの中には、V1としてpyan_-, tha'-, sa.-, she'-, pou_-, txa_-, txei'-, te_-などの動詞を持つもの、および、V1またはV2としてtxwa:-, la_-を持つものが含まれる。

タイプｃ：-lou. によるパラフレーズのみが可能なもの

これらの中には、V2として nei_-, pi:-, kaun:-, ya.-などの動詞を持つ連続が含まれる。[11)]

タイプｄ：どちらのパラフレーズも不可能なもの

これらの中には、V2として pya.-, pei:-, tha:-, ci.-, pyi'-, cha.-, txwa:-, la_-などの動詞を持つ連続が含まれる。

2.2.2. 複合動詞におけるパラフレーズ

複合動詞の場合には、従属節標識を用いたパラフレーズは一般にできない。しかし、あるものは次のようなパラフレーズが可能である。

特殊補語名詞aphou.によるパラフレーズ V1-V2- ＝ V1-phou. V2-

aphou.によって導かれる句は、主文の動詞V2が動作動詞である場合にはその表す動作の目的を、V2が話者の判断を表す動詞である場合にはその判断の基準を表す。V1との結合によってa-が落ちる。[12)]

複合動詞を、関係明示形式へのパラフレーズの可能性の点から分類すると、次のようになる。

タイプｅ：いかなる関係表示によるパラフレーズも不可能なもの

タイプｆ：特殊補語名詞aphou.によるパラフレーズが可能なもの

V2が kaun:-, txin.-, thai'-, a'-, lau'-, ta'-, a:-, wun.-, ye:-, lwe_-, khain:- であるような複合動詞がこのタイプに含まれる。

3．動詞連続

3.1. 動詞連続の各タイプの意味的性質

ここでは、2.2.1.で分類した動詞連続の各タイプの持つ意味的性質について概観

する。

3.1.1. タイプａの意味的性質

このタイプには、特に各要素に対する制限はない。２つの動作の継起を表すものとしてまとめることができる。この２つの事象の継起というのは、２つの要素の継起が表し得る意味のうち最も自然なものと考えられ、それゆえ、この継起的動詞連続をビルマ語の動詞連続の最も基本的な形であるとみなし、動詞連続に見られるその他の様々な意味の大部分は、この継起の意味からの派生であると考えたい。

3.1.2. タイプｂの意味的性質

このタイプの中には、V1の意味が単独の用法と異なるものと、異ならないものの２種類がある。

ア．V1の意味が単独の用法と異なるものの例

(37) ayei'　txei' - kaun:^te_‖　格好が大変良い。[13)]
　格好 <甚だしさ> 良い　VSM

(38) atan:　pyan_-te'-ya.^te_‖　再び授業に出席しなければならなかった。
　授業　<反復>出る VMD VSM
　(単独では pyan_- は「帰る、返る、返す」の意)

(39) khamya:^tou.^ka.　sa.-pyo:^ta_^phe:‖
　あなた　PL SUBJ <初回> 話す VSM <強調>
　あなたがたが最初に言い出したんだ。
　(単独では sa.- は「始まる」の意)

(40) khamya:　di_^te'　pou_ - ma-ya. ^phu:-la:‖
　あなた これ 以上 <優越> NEG 得る VSM <疑問>
　これ以上もらわなかったのか？
　(pou-は単独では「余っている、多い」の意)

この場合、V2が主動詞であり、V1はV2の表す事象が生起する状況に関する何らかの情報を補足する成分であると考えられる。この点で後述するタイプｄと似ていると言える。(3.1.4.を参照。) 補足内容としては次のようなものがある。

① V2の表す事象の時間的な性質を表す。sa.-, she'-, pyan_-, tha'-などがこれに含まれる。

② V2の表す事象に対して、相対的・絶対的な程度の多さを表す。pou_-, txa_-, txei'-, te_-などがこれに含まれる。

イ．V1・V2とも単独の用法と異ならないものの例

V1・V2の少なくともどちらか一方が移動を表す動詞であるものを含む。

③ V2がtxwa:-「行く」かla_-「来る」であるもの

２つの移動の継起、あるいは、移動とそれ以外の動作の継起を表す。[14]

(41) txu_ akhan:^the:^kou_ win_-txwa:^te_‖

彼　部屋　中 GOAL 入る 行く VSM

彼は部屋の中へ入って行った。

(42) ein_^po_^ka. shin:-la_^te_‖ 家の上から降りて来た。

家 上 SRC 降りる 来る VSM

(43) nga_ bu_da_youn_^kou_ di_-txi'ta_ txe_-txwa:^te_‖

私　駅　GOAL この　箱　運ぶ 行く VSM

私は駅へこの箱を運んで行った。

(44) caun:^kou_ phana' si:-la_^te_‖ 学校にサンダルを履いて来た。

学校 GOAL サンダル 履く 来る VSM

④ V1がtxwa:-/la_- であるもの

この場合、V1が本当に移動を表しているのかどうかについて若干疑問の余地がある。これについては、後に3.2.3.の項支配特徴のところで述べる。

(45) txu_ sa_ji.dai'-hma_ sa_ou' txwa:-pha'-te_‖

彼　図書館　LOC　本　行く 読む VSM

彼は図書館へ行って本を読んだ。

(46) e:di_-shain_-hma_ moun.hin:ga: la_ - sa: ^te_‖

その　店　LOC　モヒンガー　来る 食べる VSM

その店に来てモヒンガーを食べた。

3.1.3. タイプｃの意味的性質

このタイプに属するものはごく少数であり、しかも意味的な性質もまちまちである。

V1-nei_-はV1の表す動作の進行、および、V1の表す変化の結果の持続を表す。（単独では、nei_- は「住む、いる、そのままでいる」の意）

(47) ba_ sin:za:-nei_^txa-le:‖ 何を考えているのか？

何 考える〈進行〉VSM〈疑問〉

(48) khe:dan_-ta-chaun: ca. - nei_^ te_‖ 鉛筆が１本落ちている。

鉛筆　1　QNT　落ちる〈結果〉VSM

意味の点だけを見れば、後述するタイプｄのうちV2が時間的な相を表す状況補足成分であるものに近いように思われる。しかし、V1-nei_-は以下の点でタイプｄと異なる。

i) V1-lou. nei_- のパラフレーズが可能である。（それゆえタイプｃに属する

のであるが。)

ii) V1のみを否定にした次のような形式が存在する。タイプdでは、このような形式はない。

(49) ba_-hma. ma-sin:za:^phe: nei_^te_‖ 何も考えないでいる。cf.(47)
CMD NEG CMD

iii) nei_- 単独でも「そのままでいる」の意味を持つ。これに対して、タイプdのV2は単独の用法と意味が異なる。

(50) alou' lou'-chin_-yin_ lou'| alou' ma-lou'-chin_-yin_ nei_‖
仕事 する〈願望〉SCM そのままでいる
仕事をしたければしろ、したくなければそのままにしていろ。

以上の点から、nei_- はタイプdのようにV1の状況補足成分なのではなく、単独の動詞であると考えたい。

V1-pi:- は、V1の表す動作の完了を表す。(pi:-は単独でも「終わる」の意)

(51) khin_bya: thamin: sa: - pi: ^ pi_ -la:‖ 御飯を食べ終わったか?
あなた 御飯 食べる 終わる VSM〈疑問〉

V1-kaun:- は、V1の表す事象の生起に対して、望ましいという判断を表す。(単独でもkaun:-は「良い」の意)

(52) cano_^tou. to_do_ zaga: pyo:-kaun:^te_‖
私 PL ずいぶん 言葉 話す 良い VSM
たっぷり話をして楽しかった。

V1-ya.- は、V1の表す事象の生起に対する容認・許可を表す。[15] (ya.-は単独では「得る」の意、ただし「かまわない」の意もある)

(53) mei_mei_ ei'- ma - ya. ^ phu:-la:‖
母 眠る NEG かまわない VSM〈疑問〉
お母さんは眠ってはいけないの?

3.1.4. タイプdの意味的性質

このタイプの連続において、V2の意味は、それぞれ単独で用いられたときの意味と異なる。

(54) mane'phan_-alou'-atwe' kaun:gaun: ei'-tha:-me_‖
明日 仕事 …のため よく 眠る〈保持〉VSM
明日の仕事のためによく寝ておこう。
(tha:- は単独では「置く」の意)

(55) hyi. - yin_ sa: - ci. ^ chin_^te_‖ あるのなら食べてみたい。
ある〈仮定〉食べる〈試行〉〈願望〉VSM

（単独では ci.- は「見る」の意）

(56) myan_myan_the'de'　lou'-pyi'-lai' ‖　さっさと仕事をしてしまえ！

すみやかに　　する〈徹底〉〈決断〉

（pyi'- は単独では「投げる、抛る」の意）

(57) yaun: - cha. - lou.　ya.^te. ngwei_za.^kalei:^kou_-le: |

売る〈躊躇なさ〉SCM 得る ACM　小金　　DIM　OBJ …も

売り払って得た小金をも…(Mauntxaya:30)

（cha.- は単独では「落とす」の意）

(58) ama.　-atwe'/asa:　　thamin:　che'-pei:^te_ ‖

姉 …のため/…のかわり 御飯　炊く〈授益〉VSM

お姉さんのために／かわりに御飯を炊いてあげた。

（pei:- は単独では「与える」の意）

(59) phou:wa_　gaun:　nyei'-pya.-lai'-te_ ‖　ポウワーはうなずいて見せた。

（人名）　頭　振る〈提示〉〈決断〉VSM

（pya.- は単独では「見せる」の意）

(60) lu'la'yei:-atwe'　cou:za: - la_ ^ te_ ‖　独立のために努力してきた。

独立　…のため 努力する〈持続〉 VSM

(61) ei: - la_ ^pi_ ‖　寒くなってきた。

寒い〈漸進〉VSM

（単独では la_- は「来る」の意）

(62) lu'la'yei:-atwe'　cou:za:-txwa:-me_ ‖　独立のために努力していこう。

〈持続〉VSM

(63) ei:-txwa:^te_ ‖　寒くなってしまった。

〈完了〉VSM

（単独では txwa:- は単独で「行く」の意）

以上の例からも明らかなように、これらの連続においてはV1が主動詞であり、V2はV1の表す事象に対する状況補足成分として働く。補足の内容としては、次の２つがある。

① V1の表す動作に対する主体の意図。tha:-, ci.-, pyi'-, cha.-, pya.-, 及び pei:- の場合がこれに当たる。

② V1の表す事象の取る時間的な相。txwa:-, la_-の場合がこれに当たる。

タイプｂにも時間表現に関わる状況補足成分を含む動詞連続があったが、タイプｂの方が、回数や継続性など直示中心に依存しない時間的性質を表示するものであるのに対し、このタイプは、ある時間的な直示中心に基づいた事象の時間的な相の表示に関わるという点で異なっている。

3.2. 動詞連続の項支配特徴

動詞配列は、それが連続であれ、複合であれ、複数の動詞形態素を含んでいる。各々の動詞は、その語彙的な要求として、どのような意味役割の項を取るかに関して一定の枠を持っていると考えられる。[16] 各々の動詞が単純動詞として動詞述部に現れるときには、動詞の項支配枠はそのまま動詞述部全体の項支配枠となり、それに従って補語を取って動詞句を形成する。しかし動詞配列においては、複数の動詞の項支配枠の総和がそのまま動詞述部全体の項支配枠となるわけにはいかない。動詞連続が成立するためには、これら複数の動詞の項支配枠に対して、何らかの調整が行われる必要がある。ここでは動詞連続の各タイプの項支配特徴を観察し、さらにそれらを動詞述部及び動詞句一般に課される制約の観点から考察する。

3.2.1. タイプａの項支配特徴

タイプａは、事象の継起を表すものであり、動詞配列の持つ意味のうちで最も基本的なものであると考えた。では、どのような事象の継起であっても、これを動詞連続にして表すことができるだろうか。例えば、次のような場合を考えてみよう。

(64) txu. ma'san_da.-ye.-wu'thu.^kou_ pha'-pi: cano_ moun.hin:ga:^kou_
　　彼　（人名）　PM　小説　OBJ　読む SCM　私　モヒンガー　OBJ
sa:^te_||
食べる VSM

彼はマ・サンダの小説を読み、私はモヒンガーを食べた。

上の文で、sa:-「食べる」と pha'-「読む」は、それぞれ、動作者と被動者の項を要求する。上の例の通り、２つの事象の継起を表すために、先行する動詞の末尾に従属節標識の-pi:を付加することは可能である。しかし、この２つの動詞を動詞連続にすることはできない。

(65) *txu. ma'san_da.-ye.-wu'thu.^kou_ cano_ moun.hin:ga:^kou_
pha'-sa:^te_||

この場合には、一つの動詞句の中に、動作者の意味役割を持つ主語項であるとみなされ得る-0名詞句が２つ、被動者の意味役割を持つ非主語項であるとみなされ得る-kou_ 名詞句が２つ、それぞれ存在する。この場合に動詞連続が許されないのは、同一の役割を持つ複数の項が動詞句中に現れているからに他ならない。

ビルマ語では、先行文脈における出現や、話者・聴者相互の了解などにより、自由に名詞句など文の構成要素の省略が行われる。それなら、(65)の文から-0名詞句・-kou_ 名詞句をそれぞれ１つずつ省略した次のような文は正しい文であると言えるかどうか。

(66) cano_ ma'san_da.-ye.-wu'thu.^kou_ pha'-sa:^te_||

(64)の意味に取る限り、明らかに不適格である。この意味に取ることのできる唯一の構造は(64)そのものである。(66)の文では、動詞sa:-およびpha'- が共通の主語項cano_ を支配すると解されよう。また非主語項ma'san_da.-ye.-wu'thu.^kou_ は、sa:-とpha'- に共通な被動者の非主語項であると解される。その状況がどんなに奇妙なものであると思われても、これが(66)の文に許される唯一の解釈である。

上で用いた「同一の役割」という表現が何を意味するのかについて、少し補足を加えておきたい。この場合の「役割」とはおおむね意味役割を意味するものと考えてよい。項の持つ意味役割は、その項を支配する動詞の意味にかなり依存する。それゆえ、動詞Ａのある１つの項の意味役割と、動詞Ｂのある１つの項の意味役割が同一であるかどうかを認定するのは大変微妙な問題であるが、それでも、動作者・被動者・起点・目標点などといった意味役割のクラスを設定することは不可能ではなかろう。[17] このようなクラスの設定の可能性を前提とするなら、意味役割の同一性を云々することは意味のあることである。

ただし、主語項だけは別にして考えなければならない。主語項の意味役割は、動詞によって様々なものがある。もしも「同一の役割」が、単に「同一の意味役割」を指すのだとしたら、異なる意味役割の主語項を持つ２つの動詞は、それぞれの主語項が同一の名詞句でない場合にも、そのまま動詞配列を形成し得ることになってしまう。

(67) cun:galei:-hman: ··· hyin_^ka. be_-lou_ lou'-txi.-hma_-le:|[18]

（唐辛子の種類）こと　　あなた SUBJ どのように する 知る NCM〈疑問〉

「小島唐辛子」だということを…あなたはどのようにして知るのか？

(Mauntxaya:25)

上の文では、動詞lou'-「する」が動作者の主語項を、txi.-「知る」が経験者の主語項を、それぞれ取り、しかもその２つの項は同一でなければならないのである。

これまでの考察に基づき、動詞連続タイプａの項支配特徴は次のようなものである。

i) 各々の動詞は同一の名詞句を主語項に取る。

ii) 各々の動詞が同じ意味役割を持つ非主語項を取る場合、その項は同一の名詞句である。

２つの動詞要素がどのような意味役割の主語項を持つかに関してはさらに細かい観察が必要であると思うが、少なくともこのような特徴を満たさない場合にタイプａの連続が不可能であることは確かである。

3.2.2. タイプｄの項支配特徴

タイプｄのV2は、それ自体が独立した事象を表さず、V1の表す事象の状況補足成分として働くものである。注意しなければならないことは、このタイプのV2として用いられる動詞が、タイプａの要素として用いられる場合もあるということ、そして、その場合には独立した事象を表し得るということである。

このような、同じ動詞がタイプｄのV2として用いられた場合とタイプａの要素として用いられた場合の違いを、次のように解釈したい。すなわち、タイプａにおいては、これらの動詞は主語項をとるのに対し、タイプｄにおいては主語項を取らないのであると。[19]

非主語項に関しては、様々な場合がある。V-pya.- では、他者への動作の提示を表すpya.- が、V1とは独自に受領者を表す項として -kou_名詞句を取る。（この意味では、この受領者の項は動作の被提示者の意味として解釈される。）次に、V-pei:- では、他者に利益を及ぼすことを表すpei:- は、V1と独自に項を取ることはないが、受益者を表す特殊補語名詞atwe'「…のために」/asa:「…のかわりに」つきの名詞句と一種の共起関係に立ち得る。[20] 最後に、V-tha:-, V-ci.-, V-pyi'-, V-cha.-, V-txwa:-, V-la_- などでは、各々のV2は非主語項を取らず、特定の種類の付加的補語と共起関係に立つこともない。いずれにせよ、このタイプの動詞連続で、V1とV2が同じ意味役割の主語項を取ることはないのである。

以上をまとめると、動詞配列タイプｄの項支配特徴は、次のようなものになる。

i）V2は主語項を取らない。

ii）各々の動詞は同じ意味役割の非主語項を取らない。

3.2.3. タイプｂの項支配特徴

①② V1がV2の表す事象の状況補足成分である場合。

主語項に関しては、タイプｄの場合と同様に考え、V1が主語項を取らないとする。

次に非主語項であるが、このタイプのV1は一般に非主語項を取らない。ただ、優等比較を表すpou_-V2- とtxa_-V2- は、比較の基準を表す特殊補語名詞ate'つきの名詞句と共起関係に立つ。

以上からわかるように、V1がV2の表す事象の状況補足成分であるものの項支配特徴は、タイプｄのそれと鏡像関係をなしていることがわかる。

i）V1は主語項を取らない。

ii）各々の動詞は同じ意味役割の非主語項をとらない。

③ V2が移動を表す動詞である場合。

主語項に関しては、V1・V2とも主語項を要求し、２つの要素は同一の名詞句を主語項として取らねばならない。

非主語項に関しては、これらの連続のV2は、V1とは別個に起点の-ka.項や目標点

の-kou_ 項を取り得る。ただし、V1が起点や目標点を表す項を要求する場合には、２つの要素は共通の名詞句をそれぞれ起点・目標点として取らなければならない。

よって、これらの連続の項支配特徴は、タイプａのそれと同じである。意味が共に２つの事象の継起であることを考えると、これは当然の事であろう。むしろ不思議なのは、このタイプにおいて-lou. によるパラフレーズが不可能なことであると言える。

④ V1が移動を表す動詞である場合。

主語項に関しては上と同じであり、２つの要素が共に主語項を要求し、かつ同一の名詞句を主語項に取る。

非主語項については面白い現象がある。これらのV1は決して非主語項を取らないのである。

(68)a. *thamin:zain_^kou_ bama_-asa:asa_ txwa: -sa: ^te_‖
食堂 GOAL ビルマ 食べ物 行く 食べる VSM

b. thamin:zain_-hma_ bama_-asa:asa_ txwa:-sa:^te_‖
LOC

行って食堂で御飯を食べた。；食堂に御飯を食べに行った。

(68)a.のようにthamin:zain_「食堂」が場所の意味役割を示す格標識-hma_ を取る形式は可能である。しかし、動詞txwa:-は-hma_ を伴う項を取らない。この場所を表す補語は、むしろ動詞sa:-「食べる」に支配されていることになる（ただし、sa:-の要求する項としてではなく、付加的な補語としてである。）

txwa:-がV2に現れる場合には起点・目標点を表す項を取ることを考え合わせると、V1として項をとらないということはいかにも奇妙である。動詞txwa:-/la_- の意味の中には、ある空間的な直示中心（おおむね発話の行われている場所）から見た移動の方向性の指定が含まれる。ゆえに、txwa:-/la_- が項を取らなくても意味をなす場合もある。しかし、付加的に項を伴うことさえ許されないというのは、やはり不思議である。さきに、この場合が本当に移動とそれ以外の動作の継起を表すかどうかについて若干の疑問があるとしたのはこのためである。むしろ、この場合のtxwa:-/la_- は、単に発話の場所に対する事象生起の場所の位置づけを示す機能しか持っていないのだと考えたい。

ともかく、これらの連続の項支配特徴はつぎの通りである。

i） 各々の動詞は同一の名詞句を主語項に取る。

ii） V1は非主語項を取らない。

3.2.4. タイプｃの項支配特徴

V1-nei_-については特に問題はない。V1とnei_-は共通の主語項を取り、nei_-は

非主語項をとらない。よってその項支配特徴はタイプａの場合と同じである。

V1-ya.- の場合にも問題はない。ya.-はいかなる項も取らない。許可の意味を持つya.-は、動詞連続以外の環境でも決して項を取らないのである。この動詞連続を含む動詞句では、すべての項がV1に支配されている。この場合には、V1を中心とする動詞句とya.-との単なる並列ということになる。

問題となるのは、V1-pi:- の場合、及び、V1-kaun:- の場合である。非主語項に関しては、pi:-もkaun:-もこれを取らないので問題ではない。考慮を要するのは主語項についてである。pi:-もkaun:-も、単独で用いられた場合には主語項を取り得る。

(69) sa_mei:bwe:　pi: ^te_‖　試験が終わった。
　　試験　終わる VSM

(70) di_-abei'dan_　kaun:^te_‖　この辞書は良い。
　この　辞書　良い　VSM

ただし、実際の会話やテキストなどには主語項を明示しない例が多く見られるようである。

(71) txu_-ne.^txa_　zaga:　pyo:-nei_-yin_　pi:-hma_　ma -　hou'　- phu:‖
　彼　COM CMD　話　話す いる SCM 終わる NCM NEG そうである VSM
　彼とだけ話していては、決着はつくまい。(大野:196)

(72) e:di_-acaun:^caun.　txu_　yu_-tha:-yin_　kaun:-me_^te.‖(Okell:255)
　その　事柄　…のゆえ 彼 預かる<保持>SCM　良い VSM <伝聞>
　そのために、彼が預かっておけばいいだろうってさ。

とは言え、上の(71)(72)の場合にも、または動詞連続の場合にも、単独で用いられた(69)(70)と同じく、pi:-が何かある事柄の完了を表し、kaun:-が何かあるものや事柄に対して望ましいとする話者の判断を表していることには変わりはない。ということは、動詞連続の場合にもpi:-やkaun:-は論理的には主語項を要求していると考えたい。

しかし、動詞連続の場合、pi:-やkaun:-が論理的に要求するはずの主語項は、決して顕在しない。それで、動詞連続のV2としてのpi:-やkaun:-の主語項が何を指すかということが問題になる。

pi:-の場合には、その主語項は常に何かの出来事を表すような名詞でなければならないという選択制限があるが、そのような名詞を主語項に取るような動詞は、決してpi:-とは連続をなさない。だから、V1-pi:- においてV1とpi:-がそれぞれの主語項として同一の名詞句を取るということは有り得ない。では、V1の非主語項はどうか。確かに、次のような例では、V1の支配する非主語項の-0名詞句をV2の潜在的な主語項が指示すると考えられないこともない。

(73) khin_bya:　alou'　lou' - pi: ^pi_ -la: ||
　　あなた　　仕事　する 終わる VSM 〈疑問〉
　あなたは仕事をし終わったか？
しかし、そうは考えられない例も多い。
(74) khin_bya:　thamin:　sa:-pi:^pi_-la: ||
　　御飯　食べる
　あなたは御飯を食べ終わったか？
この例では、pi:-の潜在的な主語項がkhin_bya:　thamin:　sa:-「あなたが御飯を食べる」を指示すると考えられる。すなわち、V1によって支配される構造全体がV2の論理的な主語項に当たるわけである。よく考えてみると、さきに掲げた(73)の場合にも、pi:-の潜在的な主語項はkhin_bya: alou' lou'- 「あなたが仕事をする」を指示すると考えて差し支えない。つまり、pi:-の論理的な主語項は、常にV1によって支配される構造全体であるとすることができる。

いま便宜的に、動詞配列を含む動詞句内部で動詞Ｖおよびｖに直接支配される項からなる構造をＶの「支配領域」と呼び、vpで表すとすると、V2の「潜在的な」主語項はV1の支配領域vp1 を指示する。このことは従属節標識-lou. を用いた関係明示の形式においても等しく当てはまる。

kaun:-の場合には、主語項になる名詞句にはpi:-の場合のような選択制限がないので、V1の主語項とkaun:-の主語項が同一であると考えられる例ももちろんある。また、kaun:-の潜在的な主語項がV1の非主語項である名詞句を指示すると考えられる例もある。しかし、このような例においても、判断は主語項や非主語項の表す事物そのものに対して行われるのではなく、pi:-と同じように、これらの項を含めた事象全体に対して行われるとみるべきである。それで、V1-kaun:- の場合にもkaun:-の潜在的な主語項はvp1 を指示すると考える。-lou. を用いた関係明示形式についても同じである。

V2の潜在的な主語項がvp1 を指示すると言うことは、vp1 がV2の主語項であると言うことと等価でないことに注意してほしい。vp1 の主動詞V1は動詞連続の一部として動詞述部の構成要素であり、vp1 は項ではなく、ましてや補語ですらないのである。vp1 がV2の主語項となるような形式とは、V1を含む動詞述部がV2を含む動詞述部と独立であり、前者が名詞節の中に含まれる、次のような形式である。
(75) yan_goun_^kou_　pyaun:-la_^phyi'-ta_^ka.　ma-kaun:^phu: ||
　ラングーン GOAL　移る 来る　VMD　NCM SUBJ NEG 良い　VSM
　無理してラングーンに移って来たのが、良くなかった。(Mauntxaya:57)
よって、V1-pi:-, V1-kaun:-の項支配特徴は次のようになる。
　i)　V2の主語項は文中に顕在しない。

ii) 論理的にV2の主語項に当たるのは、V1の支配領域vp1 である。ただし、V2の選択制限に違反してはならないことは言うまでもない。

3.2.5. 一般的制約から見た動詞連続の項支配特徴

以上見てきた動詞連続の項支配特徴をまとめ、それを動詞述部および動詞句一般への制約の観点からとらえなおすと、概略次のようなことが言える。

＊動詞連続全体で、１つの主語項を取らなければならない。

ビルマ語の動詞句は、多くの場合、その中に１つの主語項を含んでいる。中には主語項を取らない動詞もあるが、[21] 動詞句が２つ以上の主語項を含むことは、通常はない。

ただし、１動詞句１主語項という言い方は、あまり適切ではない。以下に示すように、主語項を含む名詞節・関係節を含む文では、主文の動詞を含む動詞句中に２つの主語項があると言えなくはないからである。

(76) txu_ bama_-pyi_ˆkou_ txwa:ˆta_ cano_ txi. ˆ te_‖
彼 ビルマ 国 GOAL 行く NCM 私 知っている VSM
彼がビルマへ行ったことを私は知っている。

(77) manei.ga. khin_bya: cai'-te. mein:galei:ˆka. la_ˆte_‖
昨日 あなた 好きだ ACM 女の子 SUBJ 来る VSM
昨日あなたの好きな女の子が来た。

よって、より厳密には１動詞述部が１主語項を取るというべきである。これは単純動詞を含む動詞句の場合には自明のことであるが、動詞配列、特に動詞連続を含む動詞句の場合にも、やはりこの制約を満たさなければならない。

動詞句は、それぞれ一まとまりの陳述内容をかたちづくる陳述単位であると考えることができる。話し手が自身をも含めた世界の現象を言語化して一まとまりの陳述内容として扱うとき、その現象の中のある１つの点に着目し、そこから現象全体を観察するという方法が取られる。現象の観察が複数の視点から行われることはない。相互動作を表す特別の動詞述部を用いない限り、他動的な現象を動作者と被動者の２つの視点から同時に観察したり、授与の現象を送り手と受け手の両側から陳述することはできない。そして、個々の動詞句に結び付いた事象観察には、必ず一定の視点が存在する。そのような視点の言語的表現こそが、動詞句の主語項なのである。こう考えると、それぞれ単純動詞として別々の動詞述部に現れるならば独立の主語項を取り得るはずの２つの動詞が、動詞連続として同一動詞述部内にあるときには共通の主語項を取らなければならないということも理解できる。もしも共通の主語項を取らないとすると、視点の分散が生じるからである。

もちろん、形式的には動詞であっても、主語項を取らない要素が動詞述部の中に現れることは可能である。その場合にも、１動詞述部１主語項の原則を破ることにはならないのは明かである。以上から、１動詞述部１主語項の原則を守るためには、２つの動詞要素が共通の主語項を取るか、動詞要素の一方が主語項をとらないかのどちらかである必要があると言える。

ただし、この原則に反する場合が存在する。言うまでもなくそれは、V1-kaun:-およびV1-pi:- の場合である。これらの場合には、pi:-およびkaun:-の主語項が決して顕在することがなく、それが特定の名詞句でないもの、つまりV1の支配領域 vpl を指示するということで、特例としておきたい。

＊同一の意味役割を持つ非主語項が２つあってはならない。

これも、動詞句一般に対して課される制約である。これまた単純動詞を含む動詞句の場合には自明のことである。

動詞述部が文や節の末尾に来るというビルマ語の特徴ゆえに、動詞配列V1-V2-の項は、それがV1に支配されるものであれ、V2に支配されるものであれ、すべて動詞述部に先行しなければならない。今かりにV1・V2がそれぞれ別個に被動者の非主語項を要求し、それらが共に格標識-kou_ を伴うとしよう。これらの項は共に動詞配列V1-V2-に先行することになるが、そうなると２つの-kou_ 名詞句のうちどちらがV1に支配され、どちらがV2に支配されるかを確定することができなくなる。言い替えれば、複数の動詞と複数の同一役割を持つ項との間の関係を１通りに確定できないような文は不適格とみなされるのである。[22)]

４．複合動詞

4.1.　複合動詞の各タイプの意味的性質

動詞連続の場合と同じように、複合動詞各タイプの意味的性質を概観する。

4.1.1.　タイプｅの意味的性質

このタイプの複合動詞は、次のどちらかである。

① 同義・類義の２つの動詞からなるもの

② ２つの動作の継起を表すもの

(78) txin:bo:　shai' - ka'　-　te_‖　船が着いた。
　　汽船　到着する　くっつく VSM

(79) txu.-akou_-ne.　txu_　shin_-tu_^te_‖　彼と彼の兄さんとは似ている。
　　彼の　兄　…と　彼　似る　同じだ VSM

(80) e:di_-dxadin:^to.　ca:-txi.^te_‖　そのニュースなら聞いて知っている。
　その ニュース　CMD　聞く 知る VSM

動詞連続のタイプａも、継起を表す２つの動詞からなるものであった。

・継起的な複合動詞（タイプｅ）の例

kain_-twe_　「持つ＋つなぐ」
ca:-txi.　「聞く＋知る」
kho_-yu_　「呼ぶ＋伴って来る」（呼んでくる）
khou'-hle:　「伐る＋倒す」

・継起的な動詞連続（タイプａ）の例

kai'-txa'　「かむ＋殺す」
khoun_-co_　「跳ぶ＋越える」
cho_-le:　「滑る＋転ぶ」
che'-sa:　「煮る＋食べる」
chaun:-phan:「覗く＋捕まえる」（隙を狙って捕まえる）

では、継起的な動詞連続と継起的な複合動詞との間にはどういう違いがあるのだろうか。おそらく、２つの事象が継起して起こる可能性の高さに違いがあるのだろう。つまり、動詞V1, V2の表す事象の継起して起こる可能性が高くなればなるほど、動詞配列V1-V2-は一まとまりの複合的な語彙単位と見なされやすくなると考える。

4.1.2.　タイプｆの意味的性質

このタイプの複合動詞は、次のどちらかである。

① V1の表す事象という観点から見た、ある具体物に対する判断を表す。V2の表すのは判断の結果対象に付与された一種の属性であり、判断の作用そのものではない。

(81) min:　di_-sa_ou'-kou_　pha'-txin.^te_‖
　あなた　この　本　OBJ　読む 適当だ VSM
　あなたはこの本を読むべきだ。
　（あなたは「この本を読む」という点に関してそうであるべきだ。）

(82) txu_　bama_zaga:　pyo: ^ ta' - te_‖　彼はビルマ語を話すことができる。
　彼　ビルマ語　話す 能力がある VSM
　（彼は「ビルマ語を話す」という見地から見て能力を有する。）

(83) di_-ganan:twe'se'-ha_　txoun:-lwe_^te_‖　この計算機は使いやすい。
　この　計算機　SUBJ　使う 易しい VSM
　（この計算機は「使う」という観点からすれば容易である。）

判断によって付与される属性の種類としては、次のようなものがある。

kaun:-　有利・賢明さ「…したほうがよい」[23]

txin.- / thai'- / a'-　当為「…すべきだ」[24]
lau'-　程度「…するほどだ」
ta'-　能力「…することができる」[25]
wun.- / ye:-　勇敢「…する勇気がある」
a:-　時間的余裕「…する暇がある」
lwe_-　容易「…しやすい」

V1-kaun:- という動詞配列は動詞連続（タイプｃ）にも複合動詞（タイプｆ）にも現れ、この２つはkaun:-の初頭音の有声化によって区別される。そして、動詞連続のV1-kaun:- の形式も、V1の表す事象に対する判断を表すものであった。動詞連続V1-kaun:- と、複合動詞V1-kaun:- との違いは、V1- が単なる判断の観点を表すものかどうかという点にある。前者においてV1- の表す事象は、その生起の現実性に関して、法標識によって表される類の法的判断の対象となり得るものである。一方後者においては、V1- の表す事象は純粋にV2- が表す判断属性のよってたつ観点に過ぎず、その表す事象は法標識の表す法のいかんにかかわらず生起することはない。これはこの類のすべての複合動詞について当てはまることである。

動詞連続

(84)a. zaga:　pyo:-kaun:^te_‖　話をして楽しかった。
　　話　話す 良い　VSM
　b. zaga:　pyo:-kaun:-me_‖　話をして楽しいだろう。；楽しかっただろう。

複合動詞

(85)a. zaga:　pyo:^kaun:^te_‖　話をしたほうがよい。
　b. zaga:　pyo:^kaun:-me_‖　話をしたほうがよいだろう。

なお、このタイプの複合動詞のV2は、有声化の可能な環境で必ず有声化する。

② 使役を表す。V2がkhain:-である場合である。khain:-は有声化の可能な環境においても決して有声化しない。

(86) cano_　nyi_ma.^kou_　sa_ou'　pha'-khain:^te_‖　私は妹に本を読ませた。
　私　妹　REC　本　読む させる VSM

(87) wun_ji:　min:^kou_　txa'-khain:^te_‖
　大臣　王　OBJ　殺す させる VSM
　大臣は（人をやって）王を殺させた。
　（khain:- は単独では「命じる」の意。）

4.2. 複合動詞の項支配特徴

複合動詞においても、その構成要素の項支配枠を動詞述部の項支配枠へと統合するために、何らかの項処理が行われなければならない。その点では、動詞連続の場

合とおおむね変わりはないと言える。ただし動詞連続と異なり、複合動詞はあくまでも複数形態素からなる１語彙であり、それゆえ形態論レベルで語形成の規則によって形成され、項処理もそのレベルで行われると考えられるから、統語論レベルでの調整が行われる動詞連続の場合とは異なる項処理のストラテジーがあっても不思議ではない。

ここでは、複合動詞の項支配特徴について見る。

4.2.1. タイプｅの項支配特徴

タイプｅには同義・類義の２つの動詞による複合と、継起する事象を表す２つの動詞による複合がある。継起を表す複合動詞においては、動詞連続のタイプａと異なるのは語彙的単位とみなされ得るかどうかという点のみであり、項支配特徴の点では同じである。同義・類義の場合にも、２つの動詞の項支配枠はおおむね同一となるから、これらの複合動詞の項支配特徴も、継起的複合動詞の場合に準ずる。

4.2.2. タイプｆの項支配特徴

まず、V2に判断の動詞を持つ①の場合について見る。判断の動詞はいずれも、単独の用法において、主語項として判断の対象となる具体物を表す名詞句を要求する。また判断の観点を表す名詞句、あるいは、動詞と特殊補語名詞aphou.による複合名詞を補語として取ることができる。この判断の見地を表す補語は、ta'-の場合には項であり、それ以外の場合には付加的補語である。

(88) di_-pya'txana_ ba_-hma. ma-lwe_ ^phu:‖
この 問題 何 CMD NEG 易しい VSM
この問題はちっともやさしくない。

(89) txu_ bama_zaga: to_do_ ta' - te_‖ 彼はビルマ語がかなりできる。
彼 ビルマ語 かなり 能力がある VSM

複合動詞において、V2の主語項は、先行文脈への出現や話者・聴者相互の了解によって省略されない限り文中に現れる。V1の支配する項については、そのうちのどれか１項は文中に顕在しない。複合動詞全体の意味を解釈するためには、これら潜在的な項が何を指すのかが決定されなければならないが、これはつねにV2の主語項の名詞句と論理的に同一であると考えられる。可能な場合としては次の２つが考えられる。

a) 潜在的なV1の主語項が、V2の主語項の名詞句を指示する。

b) V1の非主語項のうち主題(theme) の意味役割を持つものが顕在せず、それがV2の主語項の名詞句を指示する。[26]

上記a),b) の可能性のどれを取り得るかによって、判断動詞を含む複合動詞は、

次の３つに分かれる。

ｱ. V2としてkaun:-, txin.-, thai'-, a'-, lau'-を持つ複合動詞では、上記a), b)のどちらも可能である。これらの動詞の共通点は、単独の用法で主語項として有生・無生どちらの名詞句をも取ることができるという点である。

(90)a. min:　　di_-sa_ou'-kou_　pha'-txin.^te_‖
　　あなた　　この　本　　OBJ　読む 適当だ VSM
　b. min:-ha_　di_-sa_ou'-kou_　pha'-txin.^te_‖
　あなたはこの本を読むべきだ。
　c. di_-sa_ou'-ha_　min:^ka.　pha'-txin.^te_‖
　d. di_-sa_ou'-ha_　　pha'-txin.^te_‖
　この本はあなたが読むべきだ。

ｲ. V2としてlwe_- を持つ複合動詞でも、上記a),b) ともに可能である。しかし、上のkaun:-などの場合とやや異なる点がある。b)の場合、V1の非主語項のみならずV1の主語項も文中に現れてはならない。[27] またa)の場合には、V1は被動者・主題の非主語項を取ってはならず、かつ意志的な活動を表す動詞であってはならない。まとめると、lwe_- の主語項は事象に対するコントロールの度合の低い名詞句でなければならず、また、主語項よりコントロールの度合の高い名詞句が文中に現れてはいけないということになる。これは、lwe_- が単独の用法において無生名詞の主語項のみを要求することとおそらく関連があるのであろう。

(91)a. *min:　　di_-ganan:twe'se'-kou_　txoun:-lwe_^te_‖
　　あなた　　この　計算機　　OBJ　使う 易しい VSM
　b. *min:-ha_　di_-ganan:twe'se'-kou_　txoun:-lwe_^te_‖
　c. *di_-ganan:twe'se'-ha_　min:^ka.　txoun:-lwe_^te_‖
　d. di_-ganan:twe'se'-ha_　　txoun:-lwe_^te_‖
　この計算機は使いやすい。

(92) txu_-ha_　sei' sou:-lwe_^te_‖　彼は怒りっぽい。
　　彼　SUBJ　心　悪い 易しい VSM

(93) txu_-ha_　ngou_-lwe_^te_‖　彼は泣き虫だ。
　　泣く

(94) *txu_-ha_　khoun_-lwe_^te_‖
　　跳ぶ

ｳ. V2としてta'-, a:-, wun.-, ye:-を持つ複合動詞では、上記b)のみが可能である。これらの動詞の共通点は、単独用法では有生名詞のみを主語項として取るという点である。複合動詞の場合にも、これらの動詞は有生の名詞句を主語項に取るV1と結び付く。

(95)a. txu_ bama_zaga: pyo: ^ ta' - te_‖
彼 ビルマ語 話す 能力がある VSM

b. txu_-ha_ bama_zaga: pyo:^ta'-te_‖
彼はビルマ語を話すことができる。

c. *bama_zaga:-ha_ txu_^ka. pyo:^ta'-te_‖

d. *bama_zaga:-ha_ pyo:^ta'-te_‖

いずれの場合も、V1の支配領域vp1 は、V2によって支配されていると考えられる。さきにタイプｃのV1-pi:- およびV1-kaun:- について見たとき、V1がV2と同じ動詞述部に含まれるゆえに、その支配領域vp1 はpi:-およびkaun:-の補語でないとした。同じ論点に立つと、この種の複合動詞においてもvp1 はV2の補語となり得ないことになる。しかし、この種の複合動詞と同義である関係明示形式が、従属節標識ではなく特殊補語名詞aphou.を用いるという点、また、vp1 の表す事象が独立に生起するものでなく、V2の表す判断の観点としてのみ用いられているという点などから、やはりこの場合vp1 は補語としてV2に支配されるとみたい。V1とV2が同一動詞述部に含まれるのは、判断動詞V2と、その判断基準を表す補語となる動詞句の主動詞V1の間に形態的な融合が起こったからだと考えることができる。

以上をまとめると、これらの複合動詞の項支配特徴は次の通りである。

i) V1の支配する項のうちどれか１項が顕在せず、これはV2の主語項の名詞句を指示する。

ii) V1の支配領域vp1 はV2によって支配される。

次に、②の、使役の複合動詞の場合を見る。動詞khain:- は単独の用法において、-0名詞句を主語項として、-kou_ 名詞句を受領者の非主語項として、そして要求の法を取る引用文・動詞と特殊補語名詞aphou.による複合名詞・前接辞a-によって動詞から派生した名詞のいずれかを、命令内容の非主語項として取る。

(96)a. cano_ nyi_ma.^kou_ sa_ou' pha'-lou. khain:^te_‖
私 妹 REC 本 読む QM 命じる VSM

私は妹に本を読めと命令した。

b. cano_ nyi_ma.^kou_ sa_ou' pha'-phou. khain:^te_‖
…するため

私は妹に本を読むよう命令した。

c. cano_ nyi_ma.^kou_ sa_ou' apha' khain:^te_‖
読むこと

私は妹に本を読むことを命令した。

複合動詞としては、khain:- の主語項とV1の非主語項は文中に現れるが、V1の主語項は決して顕在しない。そしてこれは、必ずV2の受領者を表す非主語項の名詞句

と論理的に同一でなければならない。①の場合と同じように、V1の支配領域vp1 は項としてV2に支配されている。つまり、この種の複合動詞は、使役動詞が使役内容を表す動詞句の主動詞と融合してできたものである。

以上をまとめると、次のようになる。

i) V1の主語項が顕在せず、これはV2の受領者を表す非主語項の名詞句を指示する。

ii) V1の支配領域vp1 はV2によって支配される。

4.2.3. 一般的制約から見た複合動詞の項支配特徴

以上で見てきたように、複合動詞のタイプｅとタイプｆは、その性質においてまったく異なっている。タイプｅはいわば動詞連続のタイプａが１語彙として定着したものであり、形式的特徴を除けばおおむねタイプａに準ずるものである。一方タイプｆは、ある動詞がその補語となる動詞句の主動詞と融合してできたものである。ここではタイプｆの項支配特徴をまとめ、それを動詞句および動詞述部一般に対する制約の観点からとらえなおす。

＊V1の支配領域vp1 は、V2に支配される。

これについては先に述べた通りである。①では判断の基準を表すvp1 が、②では使役の内容を表すvp1 が、それぞれV2に支配される補語となる。

＊vp1 の中の項のうち、どれか１つは顕在しない。

＊顕在しない項はV2のどれかの項の名詞句を指示する。

①ではvp1 の主語項、または被動者ないしは主題を表す非主語項が顕在せず、これがV2の主語項を指示する。②ではvp1 の主語項が顕在せず、これがV2の受領者を表す非主語項を指示する。これらの条件が、V1とV2の融合を引き起こす原因となると考えられる。ついでながら、この同じ条件が、同義の関係明示形式における特殊補語名詞aphou.の使用を決定する原因であると考えられる。動詞とaphou.の複合によってできた複合名詞の性質については、ここでのパラフレーズ形式以外の例も含めて、今後の研究の課題としたい。

＊vp1 は独自の主語項を取ってよい。

動詞連続のところで、１動詞述部１主語項が動詞句一般の原則であるとした。ところが、①のうちV2がkaun:-, txin.-, thai'-, a'-, lau'-などであるものは、この原則に反する場合があるように見える。

しかしもし、V1が補語としてV2に支配される動詞句の主動詞であり、V1の項の１

つがV2の主語項を指示するという条件によってV1とV2の融合が起こるとすれば、言い替えれば、これらの複合動詞の項支配枠がもともとのbiclausal な性格を保持しているとすれば、V1がV2とは別個の主語項を取っても差し支えないことになる。また逆にこの事実が、vp1 がV2の補語であるという分析のしかたに支持を与えるものであるとも言える。

5．意味的性質と形式的特徴との関連

それぞれの動詞配列の持つ形式的特徴のうちのいくつかは、明らかに意味的性質を反映していると考えられる。そこで最後に、このような意味的性質と形式的特徴の関連の例を２つだけ観察する。１つは動詞連続の分類の基準となったパラフレーズ可能性の差異についてであり、もう１つは複合動詞タイプｆの一部に例外的に見られる補語修飾素の介在可能性の現象についてである。

5.1.　動詞連続のパラフレーズ可能性の差異

2.2.1.で、動詞連続を関係明示形式へのパラフレーズ可能性の点から４つに分類した。このうち、タイプａ、すなわち、従属節標識-pi:/-lou.両方によるパラフレーズが可能なものが、最も基本的な形であると考えた。

動詞連続における意味のバラエティーは、要素の並置という位置的な情報の中に、どのような意味を読み取り得るかという可能性によって決定される。その最も基本的なものは、タイプａに見られる事象の継起である。動詞要素の前後関係がそのまま事象生起の前後関係を反映するという解釈は、ごく自然なものと言えよう。動詞連続の持つ意味のうちには、このような継起の意味からの派生と考えられるものも多く、タイプｂの①②以外の動詞連続は、継起の意味を持つもの（タイプｂの③④およびタイプｃ）か、あるいは継起の意味を持つ連続から、一方の要素の意味の抽象化をへてできたもの（タイプｄ）であると考えられる。

では、分類の基準となったパラフレーズ可能性の違いは、何によるものであろうか。これは、継起をなす事象に見られる特定の性質や、事象間の前後関係のタイプなどの違いを反映していると思われる。

前述したように、従属節標識-pi:は動詞「終わる」に由来するものであり、それゆえに、-pi:によって接続される２つの動詞述部の間には特に因果関係はなく、相互に切り離されたもののように認識される。これに対して、-lou. によって接続される２つの動詞述部の間には、何らかの因果関係が存在し、相互につながりを持ったものとして認識される。タイプａにおいてはこれらのパラフレーズのどちらも可能であるが、２つの関係明示形式が動詞述部間のつながりの度合の違いを明示する

のに対し、動詞連続の形式はつながりの度合について特に指定しない無標の形式であると考えることができよう。

タイプｃの動詞連続が-pi:によるパラフレーズ形式を持たないのは、これらの連続を形成する２つの動詞の表す事象が、完全に切り離して考えることのできないものだからであると考える。V1-nei_-においてはnei_- がV1によって表される事象の未完結または事象の結果の残存を表すがゆえに、V1-pi:-, V1-kaun:-, V1-ya.- においてはそれぞれのV2がV1の意味内容を参照するがゆえに、２つの動詞要素を完全に切り離してとらえる-pi:によるパラフレーズが不可能なのである。

タイプｂの③④については、なぜ-lou. によるパラフレーズができないのか、その具体的な理由はわからない。局所的な場所表現において格標識のみならず場所名詞の使用が義務的なことや、事象の空間的位置づけを表す動詞および動詞修飾素の存在などから、ビルマ語は空間的表示という点に関してかなり「敏感な」言語であると言ってよいと思う。それゆえ、「行く／来る」といった最も基本的な移動事象に対して、特別な取り扱いをする意識があるということは考えられる。あるいはこのような意識の存在が、２つの事象の分離よりはむしろつながりを表す-lou. によるパラフレーズの使用を妨げているのではないかと推察する。

タイプｄにおいて、どちらのパラフレーズ形式をも取らないのは、V2の意味が抽象化し、もはや独立の事象を表さないからである。いわば動詞の助辞化が進行しつつあるのである。V2は、否定辞の前接と初頭音が有声化しないことで、辛うじて形式的に動詞としての地位を保っていると言えよう。[28)]

タイプｂの①②では、パラフレーズに用いられる-pi:は別の機能を持つ。このタイプにおいて、V1にタイプｄのV2と同じような意味の抽象化が起こり、-pi:はここでは、現在では主語項を持たない動詞句が一種の様態補語として用いられることを表す標識として機能する。ちょうど動詞句以外の様態副詞表現のうちあるものが付加的に格標識-ne.を取るのと似ている。タイプｂの①②とタイプｄの間の違いは、様態副詞表現と動詞修飾素の間の違いと並行的に把えることができよう。なお、タイプｂの②もすでに副詞的表現に近くなっていると考えられるが、こちらの場合には、V1はまだV2と共通の主語項を取ると考えられ、それゆえ完全な副詞的表現とはなっていない。

5.2. 複合動詞タイプｆにおける補語修飾素の介在可能性

2.2.1.で見たように、複合動詞タイプｆ①のうちV2がa:-, wun.-, ye:-, lwe_-の場合には、V1とV2の間に補語修飾素が割って入るV1-CMD V2-の形式が可能である。

(97)a. twei.^to.　　a: ^ te_‖　　会う暇はある。
　　会う　CMD 暇がある VSM

b. txwa:^to.　　wun.^te_‖　　行く勇気はある。
　行く　　勇気がある
c. pha'-to.　lwe_^te_‖　　読みやすくはある。
　読む　　易しい
(98)a. *sa:^to.　kaun:^te_‖
　食べる　　良い
b. *nei_^to.　　lau'-te_‖
　住む　　十分である
c. *pyo:^to.　　ta'-te_‖
　話す　　能力がある
d. *yei:^to.　khain:^te_‖[29]
　書く　　命じる

この違いの原因は、vp1 の表す内容に対する依存度の違いに求めることができよう。タイプｆのうちV1-CMD V2-の形式を取り得るV2は、時間的余裕(a:-) ・勇敢さ(wun.-/ye:-)・容易さ(lwe_-) など、どれも単独でかなり明確な、比較的にせよ客観的な判断を示し、しかも判断の観点を変えても判断の結果そのものにあまり変化を生じないものである。これに対して、賢明さ(kaun:-)・当為(txin.-/thai'-/a'-)はかなり漠然とした、主観的な判断を示すものであり、しかも判断の観点の選択によってその結果もかなり変わって来るという点で、判断の観点に対する意味的依存度が高いものである。程度(lau'-) ・能力(ta'-)なども判断の観点への意味的依存度は高い。また使役を表すkhain:- は、使役内容がはっきりしなければ意味をなさない。以上のようなvp1 の表す内容への依存度の違いが、補語修飾素の介入の可能性に反映しているものと考えられる。

おわりに

本稿では動詞配列をまず２つの形式的基準に基づいて動詞連続と複合動詞の２つに分類し、さらに、これもまた形式的特徴の一つとして数えられるパラフレーズ可能性から、それぞれをより細かく分類し、それぞれの意味的性質と項支配特徴について見てきた。本稿で分析した動詞配列の各タイプに対して名称を与えるとすれば、以下のようになろう。

◇動詞連続

ａ　＝継起的動詞連続

ｂ①＝副詞的動詞を含む連続（事象生起の時間的相の表示に関するもの）

　②＝副詞的動詞を含む連続（程度の表示に関するもの）

③＝継起的動詞連続（移動を含むもの）

④＝継起的動詞連続（事象生起の空間的位置づけに関するもの）

c　＝継起的動詞連続（２つの事象を完全に切り放しては考えられないもの）

d①＝補助動詞を含む連続（事象生起に対する動作主体の意図を表すもの）

②＝補助動詞を含む連続（時間的相の表示に関するもの）

◇複合動詞

e①＝同義・類義複合動詞

②＝継起複合動詞

f①＝判断複合動詞

②＝使役複合動詞

本稿では主として項支配特徴に着目して、動詞配列の分析を行った。動詞配列に関しては、副詞的動詞や補助動詞に起こった意味の抽象化や、副詞的動詞と副詞表現の関係、あるいは補助動詞と動詞修飾素の関係など、興味深い問題が残っている。-pi:/-lou.あるいはaphou.を含む構造のうち動詞配列にできないものについての研究も必要である。また、３つ以上の要素を含む動詞配列において、可能な要素の数や、ここで掲げたタイプのどのような組合せが可能であるかについても記述がなされなければならない。これらについても、いずれ考えてみたい。

補注

1. ビルマ語の文のタイプには動詞文の他に名詞文(Noun Sentence) または等位文(Equational Sentence) がある。これは、２つの名詞句の並列からなる。前の名詞句は格標識として-0/-ka. を伴い、後ろの名詞句には文標識が後続することがある。

NP1(-CM)(-CMD)　　NP2(-SMD)

txu_-ha_　txaji:^pa_‖　彼は村長です。

彼　TM　村長〈丁寧〉

hou_-lu_　be_^txu_-le:‖　あの人は誰か？

あの 人　どの　彼〈疑問〉

2. 口語ビルマ語の法標識には、文標識・名詞修飾節標識・名詞節標識の３種類がある。さらに、前者２つに関しては弱化形式が存在する。法標識にどのような形式があるかについては注11. を参照のこと。また、格標識の職能、特に名詞節標識-ta_/-hma_の用法の詳細については、澤田(1989)を参照されたい。

3. 格標識-0を持つ項の中には、-0が-kou_ と交替し得るものもある。格標識-kou_ を取る項の担う意味役割には、被動者(patient) ・主題(theme) ・目標点

(goal)・受領者(recipient) など、さまざまなものがあるが、このうち通常-0との交替が可能なのははじめの２つである。ただし、これらの意味役割を持つ-kou_ 名詞句が常に-0と交替可能なのではなく、交替の可能性は、名詞の有生性(animacy)・事象に対するコントロールの度合(the degree of control) など、様々な要因によって決定されると考えられる。なお、ここでの「主題」とは、談話分析的な意味でのそれではなく、「動詞によって状態ないしは位置(location)の変化を被るものとして指定されている物体、または動詞がその位置を指定する物体の持つ役割(Marantz(1984),p.32)」の意味で用いる。

なお、主語項の-0と交替し得る２つの標識-ka./-ha_ については、それらの分布が談話的な要因によって決定されるということのみを記すにとどめる。

4. 広義の補語(complement)は、名詞的補語の他に、副詞的表現や名詞節・従属節をも含む。名詞的補語と同様、名詞節にも項とそうでない付加的補語の区別がある。項が動詞述部によって支配されるというのは確かであると思うが、その他の補語が文中でどのような位置づけを与えられるかについてははっきりしない。特に従属節の中には、後にとりあげる-pi:/-lou.によって導かれるもののように、その表す内容からみて主文と対等であると考えられるものがあり、これらが動詞述部に支配されるといってよいかどうかについては、さらに検討が必要である。

5. 大野(1983)では、「２音節語の動詞の中には、否定辞ma- を両音節共に付ける場合もある。その際、末尾には-phu: は付かず、状態を表す動詞phyi'-につなぐ。」との記述がある(p.74)。例文としては次のようなものが挙げられている。

ma-hyin:-ma-lin: phyi'-te_‖ 曖昧だ。(hyin:lin:- 明らかだ)

ma-cei_-ma-na' phyi'-te_‖ 耐えられない。(cei_na'- 満足する)

しかし、この形は、動詞phyi'-を介していることや、否定の法標識-phu: が現れないことから、形式的にそれぞれhyin:lin:^te_やcei_na'-te_に直接対応する否定形であるとは考えられない。むしろこれは、以下の例と同じように、動詞または動詞句から派生した副詞が動詞phyi'-と結び付いてできた表現の一種として考えるべきであろう。

txu.-mye'hna_^ka. kha'-te_de_ phyi'-te_‖彼の顔はやや硬ばっている。

(kha'「やや」＋te_「硬い」の重複による副詞の形成) (大野:152)

ou:nin:khwe'nin: phyi'-te_‖しどろもどろになる。(大野:159)

(ou:「鍋」＋nin:-「踏む」＋khwe'「鉢」＋nin:- による副詞の形成)

6. 否定辞の位置にも若干のゆれがある。Okell(1969) によると、ここでのａ．の形式を取るものがｂ．の形式で現れる場合もあるということである。(ただしそれが、同一話者の発話内に現れる変異なのか、それとも話者による違いなのかは、はっきりとしない。) しかし、ｂ．の形式を取るものは、決してａ．の形式では現れ

ない。ゆえに、変異を考慮に入れても、この基準は有効である。

7. 補語修飾素という命名のゆえんは、これが名詞的補語のみならず副詞表現や従属節など、広義の補語一般につくことによる。

8. 比較的教育程度の高いビルマ人は、Vl-kaun:-/Vl-ya.- の形式を標準的なビルマ語としては正しくない形式であると思う傾向にあるようである。しかしこの形式は、小説などのテキスト中に頻繁に現れる。

9. ビルマ語の音韻体系の中で、音節末の声門閉鎖音は第４声調を特徴付けるものであると考えられる。それゆえ、有声化の環境を述べたこの文の後半は、「先行する音節が第４声調以外の声調を取る」としても同じ事である。

10. 口語ビルマ語の法標識

	要求		非要求					
	肯定	否定			肯定			(否定)
			現実的(a)	(b)	(c)	即時的	非現実的	
VSM	-0	-ne.	-te_	-ye.	-yo:	-pi_	-me_	(-phu:)
ACM	—	—	-te.	—	—	—	-me.	—
NCM	—	—	-ta_/-tha_	—	—	—	-hma_	—

非要求・肯定・現実的の３つの形式(a),(b),(c) は、それぞれ異なる話法上のニュアンスを表す。もっとも中立的なものが(a) である。

ただし、動詞によっては名詞節標識ではなく文標識を伴った補文を要求するものもあり、また、名詞節標識が文末に現れる形式もあるため、２つの区別は必ずしもはっきりしたものではない。Okell はverb sentence markerの-ta_/-hma_とspecial head noun の-ta_/-hma_の２種類を区別して取り扱っている。今のところ筆者は、文末に-ta_/-hma_の現れる文は、統語的あるいは意味的な何らかの要請のために名詞節が単独で用いられた用法ではないかと考えている。しかしこれに関してはまだ検討の余地がある。

なお、動詞が否定前接辞ma- を伴う場合、名詞節においては-te_/-me_ によって法の区別が表されるが、文末では単一の形式-phu: が用いられる。文末において、法の対立が中和していると考えることができよう。

11. さきに述べたように、連続Vl-kaun:-/Vl-ya.- は標準的な用法とは見なされない。また、Vl-pi:- の否定形式Vl-ma-pi:-もあまり標準的ではない。ここでのpi:-が動詞であり、従属節標識の-pi:とは別の語彙であることは言うまでもない。

12. a-を伴う名詞には、本来的なものと、動詞から派生したものとの２種類がある。他の要素との複合の際に前接辞a-が脱落するのは、a-を伴う名詞のほとんどすべてに見られる現象である。

13. txei'-は主動詞としての「密な、つまった」との意味上の関連性が薄いこと、

また口語でしか用いられないことから、動詞起源でないものかも知れない。しかし、従属節標識-pi:を伴って現れるという形式的特徴があるため、たとえこれが他の副詞的動詞からの類推によってできた形式であったとしても、共時的観点からこれを動詞類として分類することには根拠があると思われる。

14. ここで「継起」という時には、１つの事象がもう１つの事象に対して厳密に先行関係にある場合のみならず、一方が他方の起こっている時間内に起こる場合や、同時に開始し同時に終了する場合をも含んだ、より広い意味に取る。２つの事象の時間的関係が実際にどのようなものであるかは、文脈によって決まる。

15. V-ya.- には事象に対して動作主体の側からの選択の余地がないことを表す用法がある。この場合のya.-は動詞修飾素である。

sa:-ya.-te_‖　食べざるを得なかった。；食べることができた。

食べる VMD VSM　（動作主体にとって「食べること」以外の選択が無く、それゆえ「食べる」という事象が生起したという事実を表す。）

sa:-ya.-me_‖　食べなければならないだろう。；食べてよいだろう。

（動作主体にとって「食べること」以外の選択が無く、それゆえ「食べる」という事象の生起が不可避であるという想定を表す。）

16. Fillmoreのcase frame、Dik のpredicate frame などに当たるようなものである。また、ＧＢ理論におけるθ理論も、このような語彙的要求を理論内の原理として取り入れたものである。

ただ、ビルマ語のように、旧情報を表す文の要素（特に名詞句）を照応表現で受けず、文中から削除するのが普通であるような言語においては、何が動詞の要求する項かを厳密に規定することは難しい。動詞の表す事象に照らして、意味的な観点から決定するよりほかないであろう。

17. Marantz(1984),p.31.

18. cun:galei:は文字通りには「小島」（cun:「島」 + khalei:<指小辞>）であるが、ここではcun:galei:-ngayou'（唐辛子の種類名）の略である。（ngayou' は「唐辛子」の意。）

19. それ自体が非主語項を取るpya.- や、asa:/atwe'を伴う付加的補語との呼応関係に立つpei:- については、このことは少し奇妙に思われるかもしれない。しかし、タイプａのV2として用いられる場合に、pya.- が具体的なもの（先行する文脈に現れる）の提示を表し、pei:- が具体的なものの授与を表すのに対し、タイプｄのV2として用いられる場合には、pya.- はV1によって表される行為の提示を、pei:- は行為そのものを受益者に及ぼすことを、それぞれ表すのである。後者が動詞配列の形式でしか表せないのだから、これらの意味の違いが何らかの項支配特徴の違いに

よると考えることは、あながち奇妙なことではあるまい。

20. ここでpei:- が受益者を表す項を要求すると考えないのは、特殊補語名詞のatwe'/asa:だけでも受益者の意味役割は表示されるからである。

txami:-atwe' moun. we_-pei:^te_‖ 娘に菓子を買ってやった。
娘 …のために 菓子 買う<授益>VSM
txami:-atwe' moun. we_^te_‖ (同上)
moun. we_-pei:^te_‖ (誰かに) 菓子を買ってやった。

同じことは、タイプbのpou_-V2-やtxa_-V2-についても言える。

21. 気候や自然状況などを表す動詞、例えば、ei:-「涼しい」(「冷たい」の意味では主語項を取る), chan:-「寒い」, nwei:-「暖かい」(気候以外のものについては主語項を取る), pu_-「暑い」(「熱い」の意味では主語項を取る), lin:-「明るい」, hmaun_- 「暗い」など。

22. 被動者を表す2つの名詞句が格標識-0を取る場合にも同じ様なことが生じる。また、異なる意味役割を持つ2つの-kou_ 項(例えば被動者と受領者)の共起もできる限り回避される傾向にあり、この場合には談話的条件によって一方が省略される。何らかの形態的な制限が作用していると考えるべきかもしれない。

23. 動詞に後続するkaun:-には他に「…かもしれない」という可能性の意味があるが、これはaphou.を用いたパラフレーズができない。これは動詞修飾素であるとみなすべきであろう。

24. 当為の意味を表す動詞としては他にtan_- があるが、使用例が少数しか見いだされなかったのと、ごく限られた言い回しでしか用いられないようであることから、ここには入れていない。

25. ta'-には他に「…するのがつねである」という習性・習慣の意味があるが、これもaphou.を用いたパラフレーズは不可能であるため、動詞修飾素とみるのが妥当である。

26. 「主題」という意味役割が何を指すかについては、注3.を参照のこと。

27. これは省略が起こったためというより、主語項の指示物が恣意的であると解釈される場合に主語項を表さないのが通常であるためと考える。

28. ma-V1-V2- etc.の形式が可能な方言(ないしは個人語)では、これらの連続のV2はすでに動詞でなく動詞修飾素の一種であると見なされているかも知れない。

29. V1-CMD V1-V2- の形式はこれらのどの場合にも可能である。

twei.^to. twei.-a:^te_‖ 会う暇はある。
txwa:^to. txwa:-wun.^te_‖ 行く勇気はある。
pha'-to. pha'-lwe_^te_‖ 読みやすくはある。
sa:^to. sa:^kaun:^te_‖ 食べたほうがよくはある。

nei_^to.	nei_-lau'-te_‖	住むのに十分ではある。
pyo:^to.	pyo:^ta'-te_‖	話すことは話せる。
yei:^to.	yei:-khain:^te_‖	書かせはした。

また、aphou.を用いたパラフレーズ形式では、一律にaphou.の後ろに補語修飾素を接続することが可能である。

twei.^phou.^to.	twei.-a:^te_‖	会う暇はある。
txwa:^phou.^to.	txwa:-wun.^te_‖	行く勇気はある。
pha'-phou.^to.	pha'-lwe_^te_‖	読みやすくはある。
sa:^phou.^to.	sa:^kaun:^te_‖	食べたほうがよくはある。
nei_^phou.^to.	nei_-lau'-te_‖	住むのに十分ではある。
pyo:^phou.^to.	pyo:^ta'-te_‖	話すことは話せる。
yei:^phou.^to.	yei:-khain:^te_‖	書かせはした。

表記

音素表記はおおむね藪(1979)にならった。ただし、ṭ-をtx-に、ḍ-をdx-に、ŋ-をng- に、ň-をny- に、š-をhy- に、それぞれ改めた。

声調表記は次のようになっている。

第１声	V22	a_
第２声	V442	a:
第３声	V̲41	a.
第４声	V?44（単母音）V?41（二重母音）	a'
軽声	固有の調値を持たない。母音は常にə である。	a

なお、語境界(word boundary) と一致するclose junctureの後で有声化が起こった場合、その境界を^ で表し、有声化の起こらない境界を表す- と区別した。

略号

本稿の例文逐語訳に用いられた略号を以下に示す。

ACM	名詞修飾節標識	PL	名詞の複数表示の助辞
CMD	補語修飾素	PM	所有標識
COM	随伴者の補語を表す格標識	QM	引用標識
DIM	指小辞	QNT	数量詞
GOAL	目標点の項を表す格標識	REC	受領者の項を表す格標識
INST	道具の補語を表す格標識	SCM	従属節標識

LOC	場所の補語を表す格標識	SRC	起源の項を表す格標識
NCM	名詞節標識	SUBJ	主語項を表す格標識
NEG	否定辞	VMD	動詞修飾素
OBJ	動作の対象の項を表す格標識	VSM	動詞文標識

参考文献

Allott, A. J. (1965) "Categories for the description of the verbal syntagma in Burmese," Lingua 15, 283-309.

Comrie, B. (1981) Language universals and linguistic typology, syntax and morphology. Oxford:Basil Blackwell.

Cornyn, W. S. (1944) "Outline of Burmese grammar," Language dissertation no.38(=Lg 20.4, supplement). Baltimore:Linguistic Society of America.

DeLancey, S. C. (1980) Deictic categories in the Tibeto-Burman verb. Ph.D. dissertation. Indiana.

Dik, S. C. (1981) Functional grammar. Dordrecht:Foris Publications.

Hansson, I.-L. (1985) "Verb concatenation in Akha," Linguistics of the Sino-Tibetan area:the state of the art(=Pacific Linguistics. Series C-No.87), 287-309.

Lyons, J. (1977) Semantics vol. II. Cambridge:Cambridge University Press.

Marantz, A. P. (1984) On the nature of grammatical relations. Cambridge, Massachusetts:MIT press.

Matisoff, J. A. (1969) "Verb concatenation in Lahu: the syntax and semantics of 'simple' juxtaposition," AL 12.1, 69-120.

_____ (1973) "The Grammar of Lahu,"(= UCLP, vol.75)

Minn Latt (1962) "First report on studies in Burmese grammar," AO 30, 49-115.

_____ (1963) "Second report on studies in Burmese grammar," AO 31, 230-73.

_____ (1964) "Third report on studies in Burmese grammar," AO 32, 265-92.

Okell, J. (1969) A reference grammar of colloquial Burmese. London:Oxford University Press.

Pe Maung Tin (1954) Myan ma txada (Burmese Grammar). Rangoon:Burma Translation Society.

Richter, E. & Maung Than Zaw (1969) Deutsch-burmesisches Gesprachsbuch. Leipzig:Enzyklopadie.

Smeall, Ch. (1975) "Grammaticalized verbs in Lolo-Burmese," LTBA 2.2, 273-88.

Wheatley, J. K. (1985) "The decline of verb-final syntax in the Yi (Lolo) languages of south-western China", Linguistics of the Sino-Tibetan area:the state of the art, 401-20.

大野　徹（1983）『現代ビルマ語入門』　東京：泰流社.

澤田英夫（1988）「現代ビルマ語における補助動詞化の類型について ── 事象修飾と事象判断 ──」　京都大学修士論文.

_____（1989）「現代口語ビルマ語における法標識-ta_/-hma_の用法・機能」　京都大学大学院研究報告.

塚本秀樹（1987）「日本語における複合動詞と格支配」，『言語学の視界 ── 小泉保教授還暦記念論文集』，127-44.　東京：大学書林.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味 Ⅱ 』　東京：くろしお書房.

森山卓郎（1987）「方向・移動の形式をめぐって」，『語文』49輯，29-40.　大阪：大阪大学国文学研究室.

藪　司郎（1975）「ビルマ語の述部の構造覚え書き」，『アジア・アフリカ文法研究　4・述語』，41-52.　東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

_____（1979）『ビルマ語入門1．発音・文字・文法』（昭和54年度言語研修テキスト）　東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.（1983, 1987増補改訂）

（さわだ　ひでお、博士後期課程）